皮膚炎の状況

現在皮膚炎ありとの回答から、皮膚炎の状況について調査した。前述の設問の皮膚炎の業務に与える影響に応じて、皮膚炎の程度を重度・中等度・軽度の3群に分けて検討した。

皮膚炎の部位（図12）は、最もよく使う部位である手指が最多で、手背、手掌、手首～前腕の順に多かった。手指、手掌、手首～前腕に皮膚炎を有する割合は、皮膚炎の程度が重くなるに従って高くなった。皮膚炎の左右差（図13）については、全体では左右とも同じ程度であるという回答が過半数を占めたが、左右差がある群をみてみると、皮膚炎が軽度の場合は利き手の方、重度になるほど利き手の逆の方がひどいという割合が高くなった。一般的な手湿疹では、よく使う利き手の方に症状が強く出る傾向があるが、理・美容師の場合は、利き手の逆の手で製品・薬液のついた毛髪に触れることが多いためと思われる。

皮膚炎の症状（図14）については、乾燥、亀裂のある割合がいずれの群でも過半数を超え、皮膚のバリア機能が低下していることがうかがえる。皮膚炎が軽く業務に支障をきたさない程度であっても、種々の刺激物質、感作物質が侵入しやすい状態になっていると考えられ、アレルギー性接触皮膚炎の予防の観点からは、皮膚炎がひどくなる前からのスキンケアが重要である。紅斑、丘疹、水疱、びらん、腫脹といった湿疹性変化と考えられる症状や、かゆみ、痛みなどの自覚症状は、皮膚炎が重度になるほど多くなった。皮膚炎が重度の群にはおそらく種々の製品・薬液によるアレルギー性接触皮膚炎が多く含まれていると思われ、薬液が触れる手指、手掌、手首～前腕に皮膚炎が起こる割合が高いこと、利き手の逆側の症状が強くなりやすいことからも説明できる。

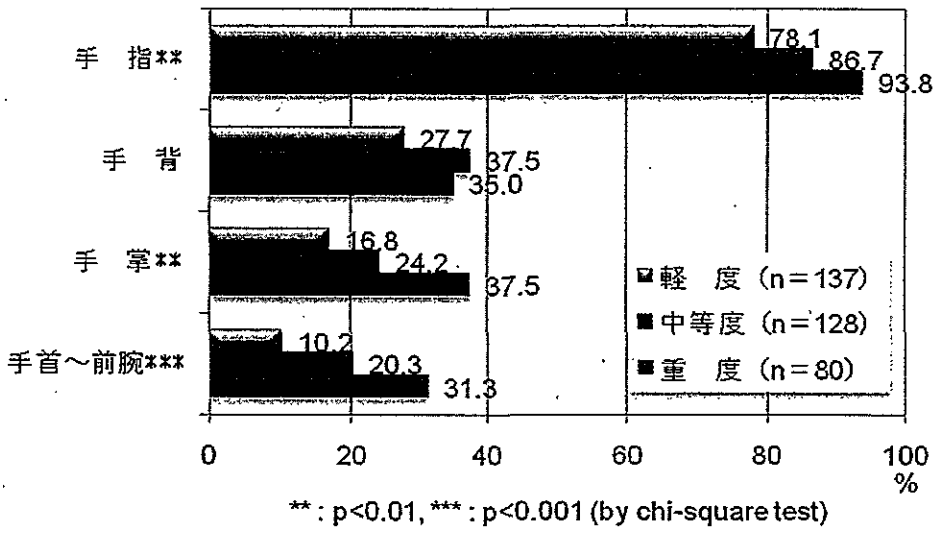


図12　皮膚炎の部位（n＝345）　現在皮膚炎ありとの回答から

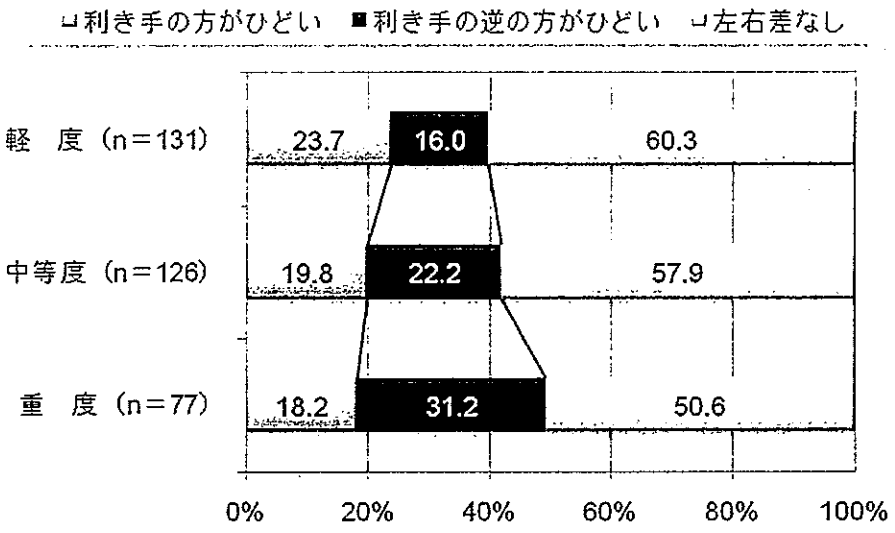


図 13　皮膚炎の左右差（n＝334）　現在皮膚炎ありとの回答から

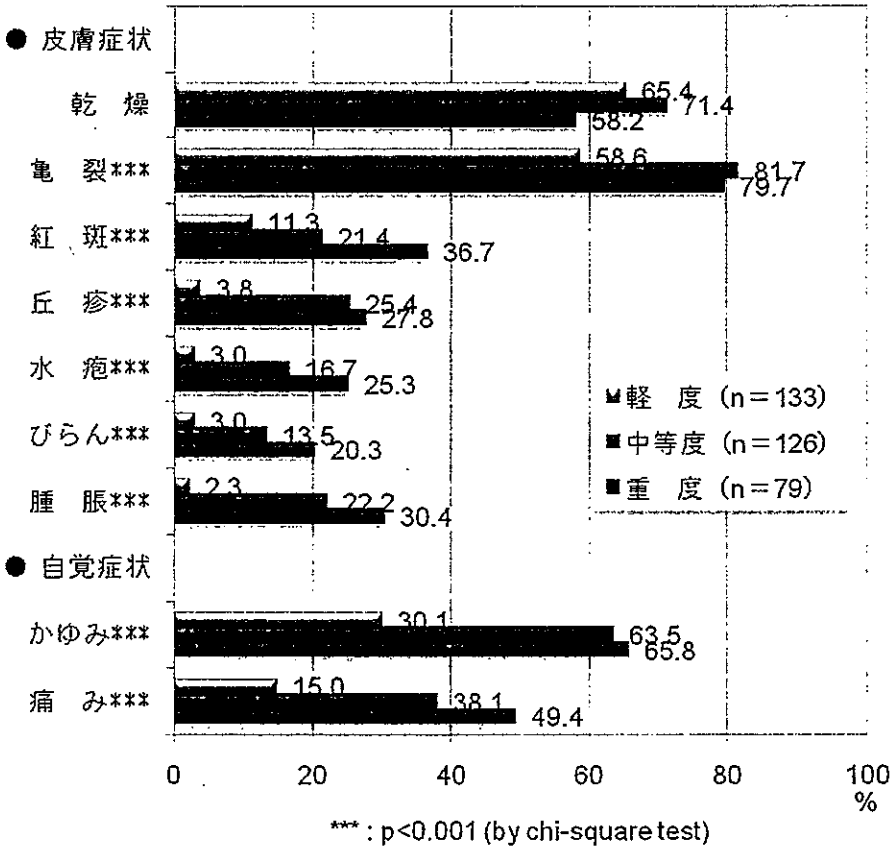


図 14　皮膚炎の症状（n=338）　現在皮膚炎ありとの回答から

皮膚炎の季節的な変化

冬に皮膚炎が悪化する、空気が乾燥すると悪化するとの声は理・美容師からよく聞かれる。そこで、皮膚炎が悪くなる季節について検討してみると、やはり多くが冬に悪化するとの回答であり、全体の4分の3を占めた（図15）。夏に悪化する割合は最も少なく5%に満たなかった。空気の乾燥といった環境の変化も皮膚炎の状況に大きな影響を与えていることが分かる。皮膚の乾燥によりバリア機能が低下するため、空気が乾燥する冬季には、職場の湿度への配慮や、スキンケアをより十分におこなうことが求められる。

また、皮膚炎が軽度であるほど冬季の悪化を自覚している傾向がみられた。季節的な変化はないとの回答は、皮膚炎が重度であるほど多くなるが、これは、この群には種々の製品・薬液によるアレルギー性接触皮膚炎が多いため、季節的な変化は出にくいものと思われる。

その他、行事が多い時期にお客さんが増えて皮膚炎が悪化する、梅雨時にストレートパーマをかけるお客さんが増えるため悪化するなどの回答もあり、客のニーズによる変化もみられるようである。

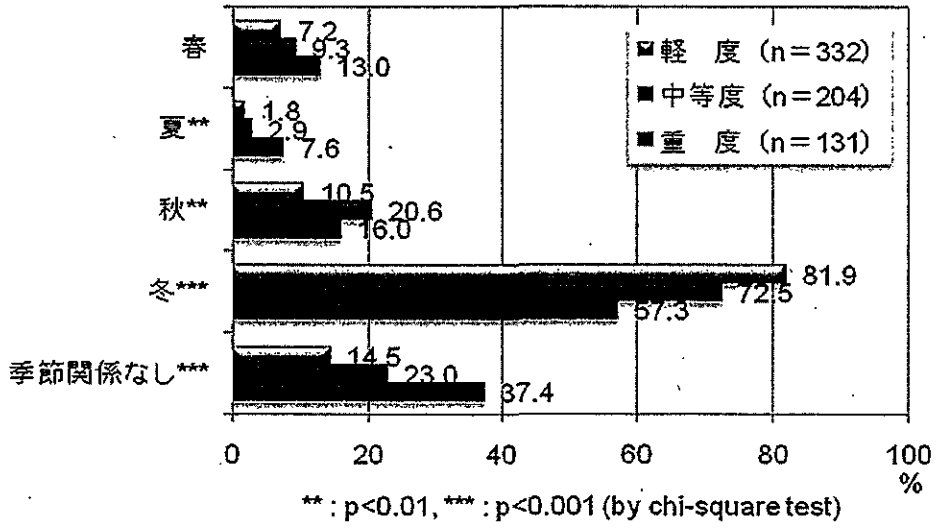


図15　皮膚炎が悪化する季節（n＝667）　現在・過去を問わず皮膚炎ありとの回答から

皮膚炎とアレルギー性疾患の合併・既往

アトピー性皮膚炎をはじめとするアレルギー性疾患の合併があると、皮膚炎に罹患しやすい傾向があることが報告されている[2,4,5]。アトピー性皮膚炎ではもともと皮膚のバリア機能が低下しているため、皮膚炎発症までの期間が短く、重症化しやすいという特徴がある。そこで、アトピー性皮膚炎、気管支喘息、アレルギー性鼻炎、アレルギー性結膜炎の合併・既往について調査した。また、蕁麻疹はアレルギー性だけでなく非アレルギー性の機序で起こることも多いが、その合併・既往についても併せて検討した。

その結果、やはり皮膚炎があるとアレルギー性疾患を有する割合が有意に高かった（図16）。特に、現在皮膚炎がある群ではアレルギー性疾患を有する割合は52.9%と過半数を超え、疾患の内訳をみるとアトピー性皮膚炎、気管支喘息、アレルギー性鼻炎で有意差を認めた。また、蕁麻疹でも、特に現在皮膚炎がある群でその割合が高かった。アレルギー性疾患があると皮膚炎が治りにくいこともうかがえる。

アトピー性皮膚炎ではもともと皮膚のバリア機能が低下しているため、種々の刺激物質や感作物質が侵入しやすく皮膚炎を発症しやすいということで説明されるが、アトピー性皮膚炎以外のアレルギー性疾患の合併例における皮膚炎の発症しやすさの機序については不明である。それらの疾患を有する個体が、潜在的な皮膚のバリア機能の低下があるのか、あるいは何らかの感作されやすい因子を持つのかもしれない。

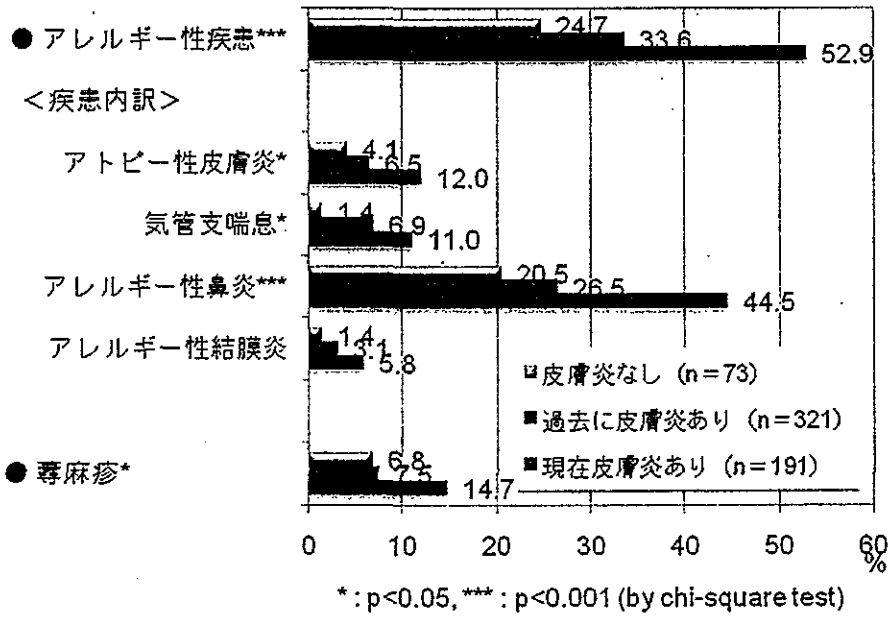


図16　アレルギー性疾患および蕁麻疹の有無（n=585）
アレルギー性疾患、蕁麻疹の合併・既往がある割合を示した。

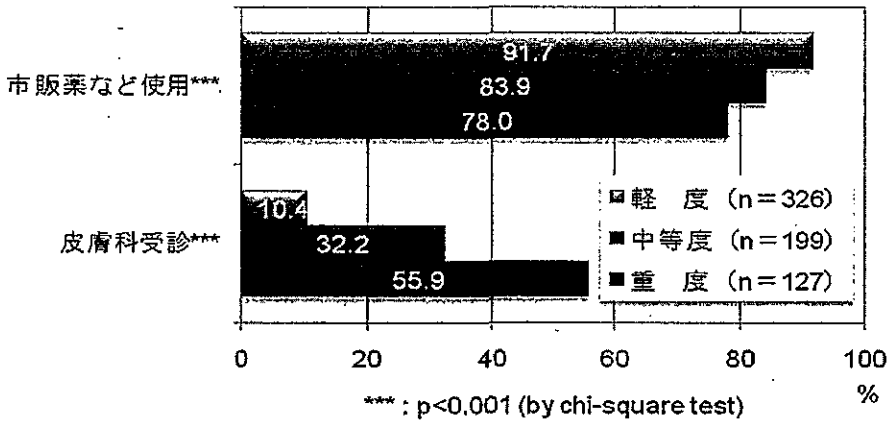
皮膚炎への対処法

皮膚炎が起こったときどのように対処しているかを、皮膚炎の経験がある理・美容師を対象に調査した。大部分の理・美容師は、市販薬などで対応しており、皮膚科を受診するとの回答は全体の４分の１程度と少なかった。皮膚炎が常に業務に支障をきたすほど重度であっても、皮膚科を受診する割合は半数を少し上回る程度であり（図 17)、多忙であるため受診する時間が取れないといった可能性も考えられる。今回、われわれ医療者側から理・美容業界への働きかけは意義のあることと言えよう。

その他、業務上の対応として、業務内容の変更（洗髪業務などを休む)、皮膚炎がひどい時は仕事を休む、使用している製品の変更、などが挙げられ、気を付けていることとして、仕事以外の時はなるべく手を休ませる、などが挙げられた。

また、皮膚炎が発生したときのお店としての対応を店主に尋ねたところ、各自の判断に任せるという回答が最も多く過半数を超えた（図 18)。皮膚炎を発症した理・美容師にとっては、仕事を続けていくうえで上司の理解を得ることは重要であるが、上司に皮膚炎の経験がない場合それが難しいといった声も聞かれる。まず店主・管理者が、理・美容師の皮膚炎についてよく理解し、従業員の理・美容師の皮膚炎の管理ならびに予防について指導することが予防策を確立する意味でも重要と考えられる。

● 皮膚炎へのケア



● 業務上の対応	単位 %	● その他気を付けていること	単位 %
・業務内容の変更	4.3	・仕事以外の時は手を休ませる	15.2
・皮膚炎がひどい時は仕事を休む	1.8	・手袋での保護（の徹底）	3.8
		・生活習慣の改善	0.9
・使用している製品の変更	1.1	・薬液を流すためよく手洗い	0.5

図 17　皮膚炎への対処法（n＝652）　現在・過去を問わず皮膚炎ありとの回答から

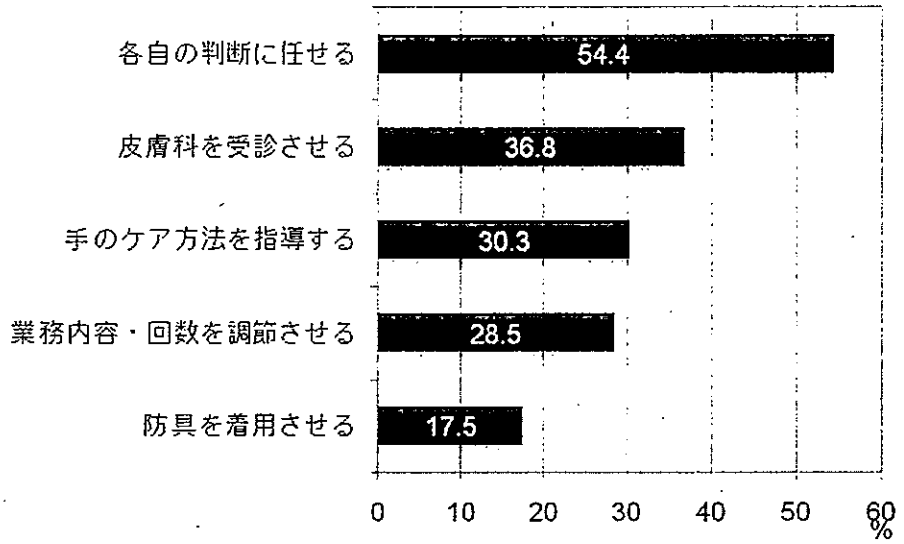


図 18　お店で皮膚炎が発生した場合の対応（n=456）　店主からの回答

防具の使用

薬液などの種々の刺激を回避するためには、防具（グローブ）の着用が、現段階では最も確実で有効な手段と考えられるが、その着用率は少ない。平松ら[2]は、ヘアカラー時は着用率が 84.2%と高いものの、パーマ時 9.5%、洗髪時 7.4%ときわめて低いと報告している。今回の調査でも、ヘアカラー時は過半数が着用しているが、洗髪時とパーマ時は常時着用する群と時々着用する群を合わせても 1 割程度と低かった。皮膚炎の有無との関係を検討してみると、洗髪時、パーマ時、ヘアカラー時のいずれにおいても、皮膚炎がない群、過去に皮膚炎があった群、現在皮膚炎がある群の順に着用率が高くなっており（図 19）、皮膚炎を有する群の方でグローブ着用率が高いという平松らと同様の結果であった。このことは、皮膚炎があるためにグローブを着用せざるを得なくなったという状況が考えられる。

グローブを着用できない理由は、作業しづらいからという意見が 9 割を占め、特に洗髪時は髪がからまり引っ張ってしまう、お湯の温度加減が分かりづらくなるといったことからグローブは避けられる傾向にある（図 20）。中には、洗髪やパーマ（ワインディング）はグローブを着用してできる仕事ではないという認識もある。また、お客さんから失礼に思われるといった意見も多い。このように、防具を着用しづらい事情があることが、理・美容師における皮膚炎対策が難しいことの一因と思われる。

理・美容師が様々な皮膚炎の起因物質に頻回に接触していることを考えると、皮膚炎がなくても防具の着用を心がけることが予防の観点からは望ましいが、実際のところは前述

のように、皮膚炎が起こってから防御するようになるというケースが多いものと思われる。防具の着用を見習い時期から習慣づけておくことも１つの対策であるが、やはり着用の煩わしさから、皮膚炎がない段階での予防の手段としては理・美容師に受け入れられ難いのかもしれない。皮膚保護剤など、使用が簡便で煩わしさのない予防手段の有用性を今後検討していきたい。

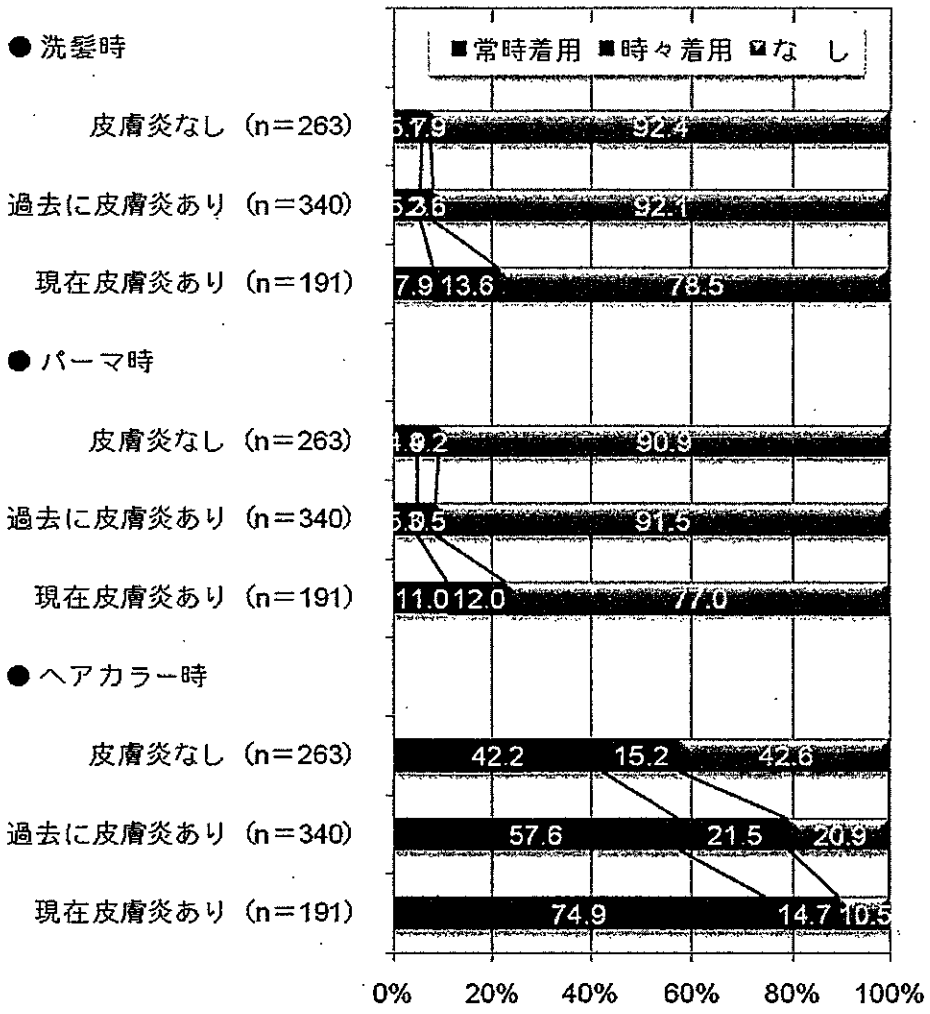
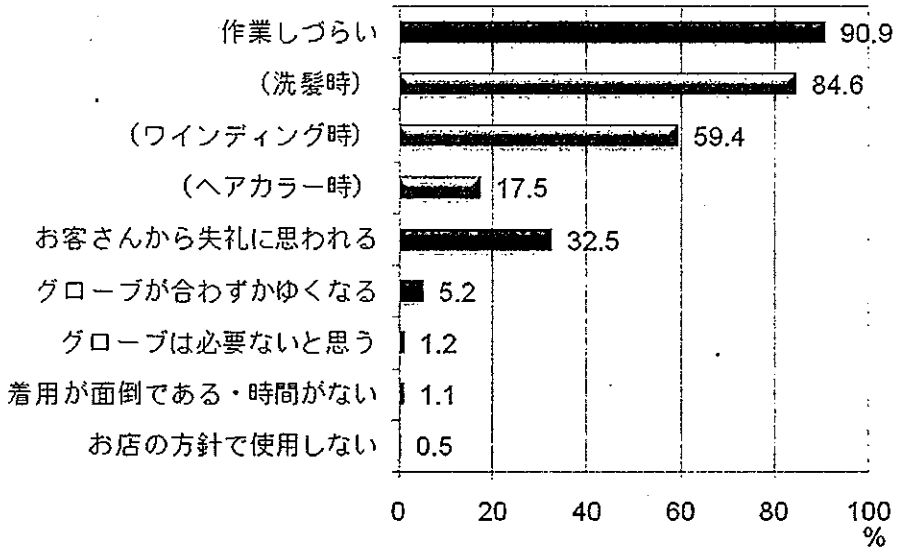


図 19　作業別グローブの着用状況（n＝794）



具体的な意見
・髪がからまり引っ張ってしまう（洗髪時）
・お湯の温度加減が分かりにくくなる（洗髪時）
・技術に影響する

図 20　グローブを着用できない理由（n=650）

皮膚炎の予後

皮膚炎の予後について検討したところ、皮膚炎の経験がある理・美容師の 7 割は、何らかの理由あるいは対策を講じることによって皮膚炎が以前に比べて軽快していることが分かった（図 21）。その理由については、昔に比べ製品の質が改善されたとの回答が最も多く約半数を占め（図 22）、良質の製品開発のためのメーカー側の努力がうかがえる。次いで、皮膚炎を起こしやすい業務が以前に比べ減少したとの回答が多かった。スキンケアや薬の使用で軽快しているのは 3 割で、やはり原因そのものがなくならないと皮膚炎は治りにくいと言える。グローブ着用で軽快したとの回答は、皮膚炎が重度であるほどその割合が高いものの 2 割程度にとどまり、グローブ着用率の低さとも関係していると思われる。

アレルギー性接触皮膚炎であっても、時に耐性を生じて皮膚炎が軽快するというケースが漆職人でみられるが[6]、一般的にはこのようなケースは稀であると思われ、やはり何らかの対策を講じる必要がある。

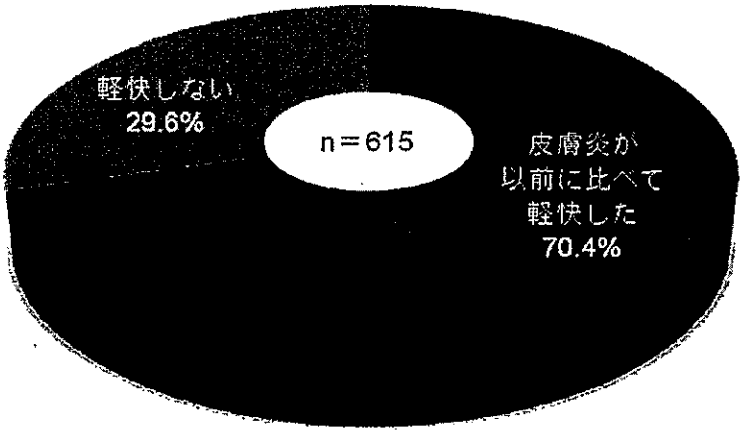
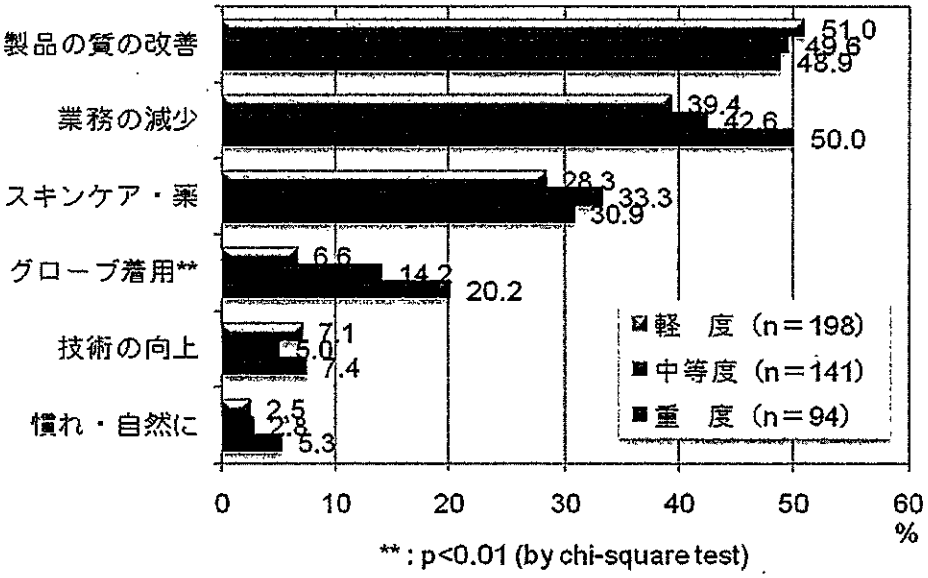


図 21　皮膚炎の予後　現在・過去を問わず皮膚炎ありとの回答から



その他の少数意見

- 製品の使用方法の変更（薄めて使用するなど）
- 作業方法の変更・工夫（同じ作業の繰り返しをやめるなど）
- 環境の変化（お店・地域が変わったなど）
- ストレスの消失

図 22　皮膚炎が軽快した理由（n＝433）

皮膚炎に対する意識

一般に、理・美容師は皮膚炎を発症しやすい職業であるとの認識があるが、実際に理・美容師は皮膚炎をどう捉えているのかを知る目的で、就業当初の皮膚炎を発症していない段階で皮膚炎とその予防に対する意識はどうであったかについて調査した。その回答を、後に皮膚炎を発症した群と発症しない群とで比較検討した。

皮膚炎非発症群では、就業当初から手が荒れないように気を付けていたとの回答が占める割合が有意に高く、皮膚炎発症群では気を付けていなかったとの回答が占める割合が有意に高かった（図 23）。就業早期からの予防の意識を持つことの重要性がこの結果から示された。理・美容師は手が荒れるのが当たり前であるとの認識は半数を下回った。皮膚炎を発症する前は、皮膚炎を身近なものとは捉えにくく予防に繋がりにくいのかもしれない。

職業教育の早い段階から、皮膚炎の原因物質、発症要因について指導することが重要であると指摘されている[5,7,8]。技術習得のために手荒れは止むを得ないという意見があるように、見習いの時期は、頻回の洗髪などにより皮膚のバリア機能が低下し、感作されやすくアレルギー性接触皮膚炎を発症しやすい状態になる。手荒れがあるときはケアを十分に行い、不必要にいろいろなものに接触しないなど、この時期から注意することで感作を少しでも予防することができるのではないかと考えられる。また、前述のようにアレルギー性疾患の合併がある場合には、皮膚炎を発症しやすいため、尚一層の注意が必要となる。

しかし、専門学校の時期から皮膚炎に関する教育を徹底することで就業者が減少するのではないかとの指摘もあり、理・美容業界サイドとよく検討していく必要がある。

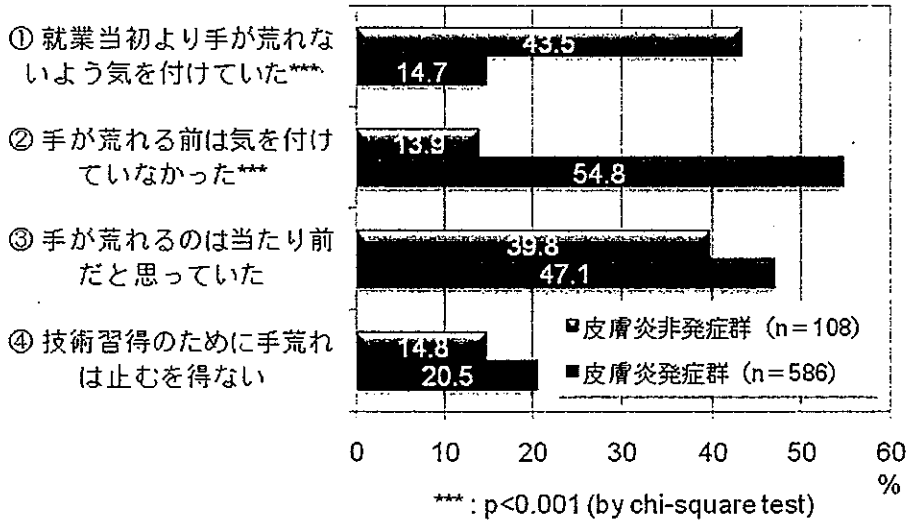


図 23　就業当初の皮膚炎に対する意識（n=694）

製品への要望

前述のように、メーカー側の努力により昔に比べて刺激性、感作性の少ない良質な製品・薬液が増え、理・美容師の皮膚炎も減少傾向にあるものと思われるが、まだまだ皮膚炎に悩む理・美容師は多い。皮膚炎予防の観点からは、皮膚にやさしい安全性の高い製品を使用することは重要である。理・美容師が、どのような製品を望んでいるのか、新しい製品を仕入れる際に最も重視している項目を挙げてもらった。その結果、「髪にやさしい製品であること」が最も多く、「皮膚にやさしい製品であること」をわずかに上回った（図 24)。

新しい製品の開発にあたっては、おそらく毛髪へのダメージの少なさが重視される傾向にあり、理・美容師の皮膚炎を起こしにくい製品開発はなかなかおこなわれない向きがある。特に感作性については十分な検討がなされていないのが現状と思われる。

種々のニーズを満たすより良い製品の開発が待たれるが、皮膚炎を予防するために現時点でできることを検討していきたい。

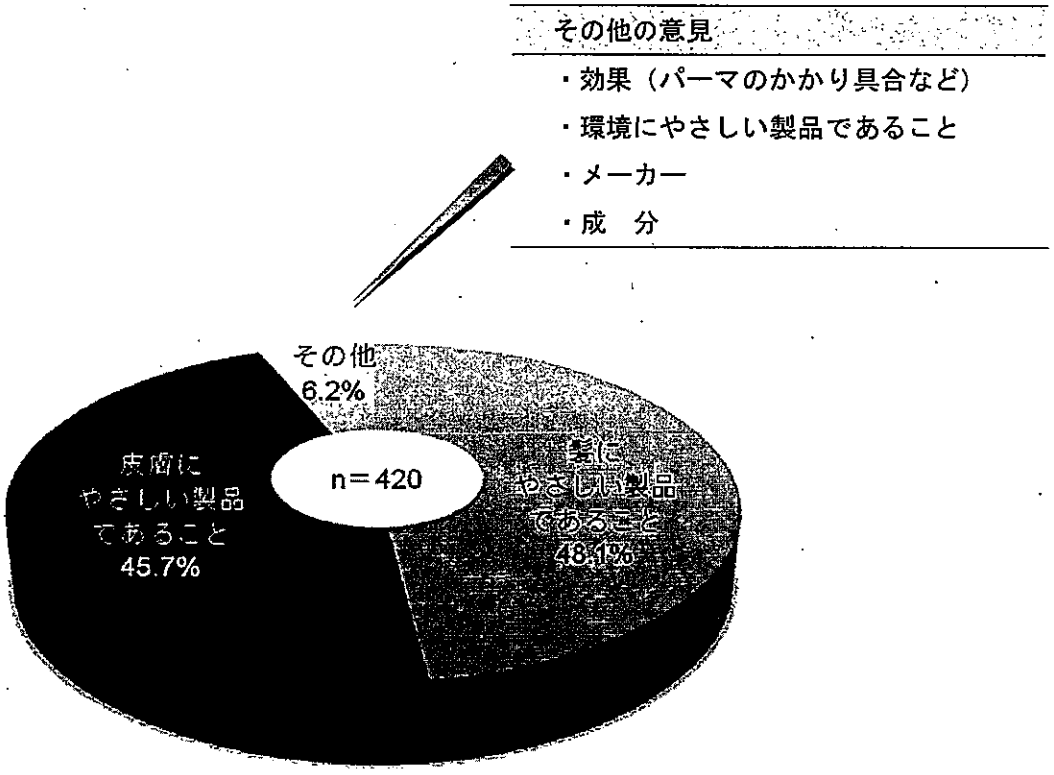


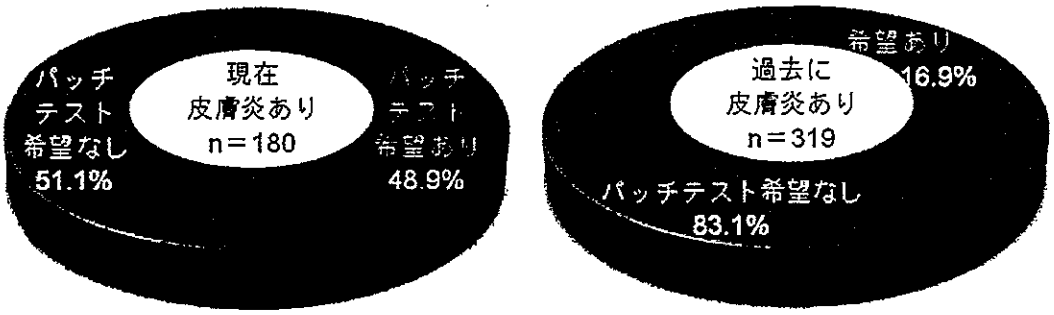
図 24　製品の仕入れの際に重視する項目　店主からの回答

パッチテストに対する要望

パッチテストは、アレルギー性接触皮膚炎の診断および原因物質の特定のために皮膚科領域でおこなわれる検査であるが、われわれの把握する限り、パッチテストを受けたことのある理・美容師はわずかである。パッチテスト用アレルゲンの準備が種類によっては容易でないことから、パッチテストを実施できる施設が限られてくることも事実である。

今回パッチテストの被験者を募集するにあたり、パッチテスト希望の有無についても調査した。対象となるのは、現在または過去に皮膚炎を起こしたことがある理・美容師である。その結果、現在皮膚炎がある理・美容師の約半数にパッチテストを受けてみたいとの希望があった。過去に皮膚炎があった理・美容師では希望する割合は低くなるが、パッチテストを受けたことのない理・美容師の中には原因物質を知りたいという希望が少なからずあることがうかがえる。

パッチテストに対する具体的な意見・要望として、やはり仕事のことを考えると複数回来院するのは難しいということが第一に挙げられた。店主・管理者が従業員の理・美容師の皮膚炎に配慮することの重要性は前述の通りであるが、この場合も、皮膚炎のひどい理・美容師がパッチテストを受けられるよう業務を調整するなど可能な限りの対応が望まれる。また、テストを受けられる施設がたくさんあるとよいなどの意見もあり、われわれ医療者側の対応も求められている。



具体的な意見・要望

- テストのために複数回来院するのは、仕事のことを考えると難しい
- テストを受けたいが、遠方で都合がつかない
- 個人医院などを含め、テストを受けられる施設がたくさんあるとよい
- テスト中入浴できないなどの制限があるのが困る
- 皮膚炎でかゆいのに、さらにテスト部位がかゆくなるのは困る

図 25　パッチテスト希望の有無